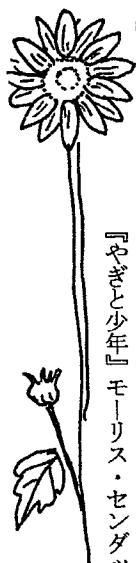


子どもの本

研究会

【私の一冊】

「やぎのズラター」

アイザック・B・シンガー 著
『やぎと少年』モーリス・センダック 絵 (岩波書店) より

坂田 多美子



私は熊本に嫁ぎ、子育てを通して、今まで知らなかつた世界を教えられ、広げてもらいました。様々な人や絵本、児童書との出会いもありました。この本も娘が入学した小学校の学校司書さんに勧められ、読みました。

「やぎのズラター」は『やぎと少年』という著作に収められているお話の一つで、著者はアメリカ国籍ユダヤ人のアイザック・バシェビス・シンガー、1978年にノーベル文学賞を受賞した世界的に有名な作家であります（ユダヤの言葉イディシ語で書かれています）。

—毛皮職人のロイベン一家は暖冬で仕事がなくお金がありません。ユダヤの人々にとつて大切なお祭りのハヌカを家族で祝うために、ロイベンは乳も出なくなつたズラターという名のやぎを肉屋に8グルテンで売ることに決めました。息子のアーロンが町の肉屋にズラターを届けて、お金をもらつてくる計画です。一人と一匹は町をめざして出発します。上天気続いたのに程なく雪が降りだし吹雪になつてしまひます。このままでは命が危ないとアーロンが神に助けを祈つた時、雪でおおわれたほし草の大きな山を見つけます。自分に嫌なことをしない人間を信じ切つていたズラターですが、この吹雪の中を連れまわされ疑心暗鬼になつたものの、自分が大好きなほし草の家に連れてこられまた安心します。ズラターはほし草を思う存分食べ、アーロンはズラターのお乳を飲んで、吹雪の中ほし草の中で3日間一緒に過ごすのです。—（『やぎと少年』より要約）

この閑ざされた世界で、少年は売つてしまつ（要らない）つもりのズラターがここに居てくれるその存在を慈しみと感じ、ズラターの「めええええ」という唯一の鳴き声には様々な意味がこめられていて自分と会話をしてくれていることに気づき、ズラターこそ今自分を支え暖を与える決して人ではなく、助け手であることに気づくのです。まさしく信頼と愛そのものです。

この本の挿絵はモーリス・センダック。地味な本ですが、子どもたちにこの様な本を紹介したくて私はその後学校司書になりました。

(大津町立室小学校 学校司書)